[redacted]

鎗　田　英　三

『ドイツ手工業者とナチズム』

九州大学出版会　1990.5　v+230ページ

私は20世紀のドイツ経済史の専門家ではないので，的はずれの書評になるのではないかという危惧を抱きながらも，あえて筆を執った．それは，ヨーロッパ工業諸国のなかにあってドイツほど手工業が大きな意味をもちつづけた国もめずらしく，近代ド

イツの経済発展における手工業の役割を再検討する必要を痛感しているからでもある．とりわけ注目すべきは手工業者の伝統的職業身分思想であり，それは経済的苦境のたびに声高に主張され，ドイツ社会に強い政治的緊張をひきおこしたことで知られる．1920年代末の世界恐慌のなかで手工業者がナチの支持者としてあらわれたのは，そのような近代ドイツの手工業問題の歴史的帰結であったのだろうか．「手工業の国」ドイツに多少なりとも関心をよせる者にとって，この問題に真正面からとりくんだ本書はまことに興味深い研究といわねばならない．

1

本書の内容を簡単に要約しよう．「序論」では，研究史が3段階に整理されている．第1段階をなすA. シュヴァイツァーは，中間層としての手工業者の反資本主義的態度を「手工業者社会主義」と称し，これに積極的に対応したナチが手工業者の支持を得たとみる．第2の段階をなしたのはH. ヴィンクラーであり，彼によれば，ナチは手工業者の「社会保護主義」と「職業身分思想」を「二重戦略」によって満足させることによってその支持を獲得した．第3段階のザルダーンほか若い研究者たちは，ヴィンクラーのイデオロギー過大評価，旧中間層に対するネガティヴな評価を批判し，ナチは「社会保護主義」的観点から手工業者の利害にこたえようとしたのではなく，むしろ資本主義の「業績原理」への適応政策をとったと主張する．

こうした研究史の整理にもとづいて，著者はとくにヴィンクラーの提示した「職業身分思想」を重要な手がかりとしつつ，ヴィンクラー後の第3段階の研究成果をも摂取して，研究の新たな地平をひらこうとする．その場合，本書の立論の基礎としてきわめて重要な地位を占めるのは，「第1章　相対的安定期の経済的状況」であり，ここでは，1930年のドイツ手工業調査にもとづいて，手工業における[適応型]と[不適応型]という2類型が設定される．[適応型]は，電気，大工，製パンに代表される手工業職種であり，これらは電力の使用や小型作業機械の導入によって合理化と市場競争力の向上に努めた．他方の[不適応型]は裁縫，指物，鍛冶職に代表され，合理化には無関心で経済的苦境におちいった．

「第2章　相対的安定期の社会状況」では，前章の類型設定にもとづいて，手工業者の組織的運動も2類型に区分される．すなわち，[適応路線]は資本主義的・労資協調的な方向をめざし，ドイツ手工業全国連盟，11の手工業者同盟，インヌングにおいて多数派をなし，手工業者運動の指導権を掌握した．これに対して経済的苦境に置かれた手工業者は，経営の家父長関係，職業教育，手工業技術を賛美する「職業身分的・権威的方向」を志向して[不適応路線]を推進したが，手工業者組織の小数派の地位にとどまらざるをえなかった．

「第3章　恐慌期の手工業者」では，1929年恐慌における手工業者の経済的困難とそれへの対応が述べられている．恐慌初期に零細経営の多い[不適応型]は窮迫状態におちいったため，職業身分思想を主張してナチ支持に向かったが，[適応型]は経済的自助と合理化によって困難に対応しようとした．だが恐慌後期には[適応型]も信用恐慌におちいり，彼らもまたナチを支持するにいたった．ただし，「経営経済的観点」に立つ[適応型]のナチへの傾斜は，[不適応型]とは異なり，ナチの雇用創出計画への期待によるところが大きかった．

「第4章　信用問題」は，手工業者の経済問題を具体的に考察した章として貴重である．1924-28年のインフレ期の信用恐慌においては，信用協同組合が危機におちいったが，政府の資金援助は微々たるものにすぎず，[適応型]は中央信用機関創設による間接的信用政策を求め，[不適応型]は「中間層銀行」の設立を要求した．大恐慌期には信用協同組合の倒産が激増したにもかかわらず，政府の対応は信用組合への資金援助という間接的信用政策にとどまったため，これを不満とする手工業者たちは「職業身分銀行」の創立を求めるにいたった．

「第5章　恐慌期の職業身分思想」では，W. ヴェルネットらによって主張された手工業者の職業身分思想の内容と意義が考察されている．職業身分思想の経済論の特徴は，資本主義の修正と社会主義の否定にあり，第3の道として「協同経済」と「職業身分の経済的自治」をめざす「職業身分資本主義」が提起された．また「社会」とは「国民協同体を形成する社会諸身分の総体」であり，したがって国家機関の政治議会は身分議会の抑制のもとに置かれるべきだった．

「第6章　恐慌期における社会民主党の中間層観」では，社会民主党指導部が手工業没落論をもち続けたために，十分な手工業政策を提示しえず，ナチに対してもその非合理主義と欺瞞性を暴露するにとどまった．党内にはこれを批判する勢力も存在し，と

くに左派は「反ファシズム統一戦線」を主張したが，彼らは党から排除された．

「第7章　ナチの手工業者への対応」では，1928-34年までの4回の選挙におけるナチの手工業政策が検討されている．ナチが本格的な手工業政策を掲げたのは1932年の選挙であり，「国民文化としての手工業」を唱えるとともに，雇用創出計画による失業の克服を訴えた．34年の選挙では職業身分思想を掲げて，[適応型]，[不適応型]両者の利害に沿う手工業綱領によって手工業者の支持を獲得した．

2

専門研究書にありがちな難解な表現は本書にはなく，叙述は非常に平明でわかりやすい．その理由は，第1に文章が簡潔であり，第2に論理の組み立てがきわめて明快であることに求められる．本書の論理展開の基本的枠組みをなすのは，手工業における[適応型]と「不適応型]，[適応路線]と[不適応路線]という2組の類型であり，手工業者とナチズムとの関係はほとんどすべてこの類型論によって説明されている．手工業は19世紀の産業革命以前から職種や地域によりかなり多様な形態を示しており，「手工業」という名のもとにすべての職種を一括することは不可能であり，この点で著者の類型設定の試みは高く評価されなければならない．そこには，一方でヴィンクラーの「職業身分思想」論を継承するとともに，他方でザルダーンら新しい研究者の「適応能力ある旧中間層」という見解をもとりいれようとする著者のバランス感覚をみることも可能である．類型論だけでは論理的にとらえきれないような問題も当然あったはずだが，そうしたものは本書では意図的に除外されているのではないかという印象さえうける．だが，類型論の枠組みにおさまりきらない問題を本書でとりあげていたら，本書の叙述はもっとわかりにくいものとなっていただろう．そういう意味で，本論の最初から最後まで類型論を貫きとおした著者の姿勢は評価されてよい．

ただ，[適応型]といい[不適応型]といっても，そうした類型化はこの時期だけではなく，19世紀はもちろん18世紀についても可能であり，手工業をめぐる経済的状況に「適応」しうる職種としえない職種には時期によって変化があったはずである．また，本書でとりあげられている指物職や裁縫職は慢性的「不適応型」だったといえるかもしれないし，大工は常に「適応型」だったということができるかもしれない．そうだとすると，2類型はいつの時代にも適用しうる「理念型」なのか，それともこの時期のみに妥当する特殊類型なのかという問題が生じざるをえない．著者はこの時期の手工業調査から2種類を析出しており，そのかぎりで[適応型]，[不適応型]は多分大戦間期にのみ妥当する類型概念なのであろう．第1次大戦前の手工業各職種の歴史的変化とは独立にこうした2類型を設定することも可能ではあるが，その場合の類型概念はナチズムと手工業者との関係を判定するためだけに用いられる機能的概念ということになるだろう．だが，その場合にも18-19世紀の手工業史との関連をまったく無視するわけにはいかないであろう．この点で，とくに両類型の歴史的性格についていま一歩踏み込んだ著者の見解を知りたいところである．

類型論のほかに本書のもう1つの特徴を挙げるとすれば，それは雑誌，新聞などの論説に重点を置いた考察であろう．第5-7章の手工業者，社会民主党およびナチの経済思想および手工業政策論はいうにおよばず，第3-4章の恐慌期の手工業者の状態にかんする議論においても，手工業問題にかかわった人々の発言が頻繁にとりあげられている．これに比して，経済過程そのものの実証研究は，手工業類型の析出の際に使用された手工業調査を別として，それほど詳細にはおこなわれていないようにみえる．その意味で，本書は手工業者とナチズムとのかかわりについてのディスクール分析のような性格をもっているとも言え，この分析が手工業の経済的現実を正確にとらえたものかどうか，疑問の余地がないわけではない．それは，著者の手工業者問題への関心のあり様を示しているようにおもえる．つまり，手工業そのものより，手工業者とナチとのかかわりを重視する著者の眼は，経済過程よりもどちらかといえば思想，政策および運動の方に向けられているということであろう．

［藤田幸一郎］